海外の話題

中国における養豚業

農林中央金庫　北京駐在員事務所長　平山　勝英

当事務所業務の中でも金庫投資セクションのサポートが大きな比重を占めているが、その中でもいまや世界第２位の経済大国となった中国のマクロ経済指標について、現地ならではの視点により分析を行いタイムリーな報告を行うことがより重要性を増しつつある。マクロ経済指標の中で真っ先に思い浮かぶのはGDP成長率であるが、これと並んで注目度が高いのが金融政策の判断を行う際に主要な材料となるインフレ率である。2010年７月頃から上昇傾向を示し始めた当地のインフレ率は、当初は水害や冷害による野菜の不作傾向が一段落すればすぐにでも落ち着くと言われていたものの、昨年７月には前年同月比6.5%まで上昇を続けた。特に、その前後から「豚肉価格の急騰」がインフレ率上昇の元凶（ピーク時には３割程度の寄与度と言われていた）としてにわかに注目を浴び始めている。以下ではその際に当事務所で確認した中国の養豚業の特色について、この場を借りて簡単にご紹介させて頂きたい。（なお、昨年７月以降インフレ率は徐々に低下傾向となり、11年通年は5.4%、豚肉価格も落ち着き始めた直近の３月時点では3.6%となっている。）

さすがに人口13億人、面積960万平方キロを誇る超大国だけあって産出量、生産量において中国が世界第１位となっている品目は少なくないが、その中でも豚肉については２位を圧倒的に引き離す量的な規模感を誇っている。多少古くはなるが08年の生産頭数ベースの数字で、豚は6.2億頭で世界シェア47%、第２位の米国の1.1億頭（シェア8.5%）を大きく上回る。これらを処理して得られる豚肉の生産量は概ね年間５千万トン程度で推移しており、消費量もほぼこれに匹敵している。よって、単純計算では中国で１日当たり平均10万トン以上の豚肉が消費されていることになる。豚肉価格高騰の報道を受け、素人考え的には「輸入を増やせばよいのではないか」と思ったところではあるが、政府の規制なのかここ数年で比較的輸入量の多かった08年でも70万トン程度、その後は30万トン程度の輸入実績しかなく、ちなみに一人当たりの豚肉消費量は年間で30kg以上、わが国（２人以上の世帯平均で20kg以下、ともに08年の調査より）の３倍以上であり、中国における鶏肉、牛肉、羊肉と比較しても群を抜いている。北京ダック、鱶鰭スープのようなトップスター級の料理は少ないものの、上海料理によく登場する豚の角煮や広東料理（飲茶）の叉焼包（肉まん）、酢豚、回鍋肉、青椒肉絲、等、家庭料理的なメニューの食材の中では豚肉は不動の地位を得ているように見受けられる。

豚肉相場が上昇しているのであれば生産量がすぐにでも増えてきそうな気がするものの、そこは「価格低迷期に飼養頭数を減らし高騰期に増やす」ことから飼養期間のタイムラグによって需給のひずみが生じる「ピッグサイクル」や、最低賃金の上昇等により現時点でも生産シェアのかなりの部分を構成する飼養頭数２～３頭の「庭先農家」の淘汰が進む構造問題、トウモロコシ等の穀物価格高騰によるコスト増、等によりなかなか需要に生産が追いつかなかった。さすがに政府によるてこ入れ策の効果もあって昨年５月頃より飼養頭数は回復し始める傾向にあったことから、年初あたりからはある程度需給バランスは落ち着き始め、冬場の需要期を過ぎた春節（本年は１月23日が旧正月の元旦）以降は豚肉価格の下落傾向が続いている。ただ、一部の報道によれば11年の豚肉の輸入量は100万トンに達したとも言われており、日本のここ数年の年間輸入量である70～80万トンを超えた模様だが、それでも需要の10日分にもならない。豚肉と言う身近な食材の話ではあるが、日本と似ているようで大きな違いのある中国の食文化や、月並みながらその市場の巨大さを改めて痛感させられている。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます